

の仕事が本当に自分のやっていきたいことなのか疑問でもあった。中途半端に仕事と子育てを両立させようとするときっと無理がくるだろう」と考えた加藤さんは、子供の手がある程度かからなくなるまで仕事はいっさいしないことを決めた。そして、再びご主人が東京へ転勤することになるが、その後5年間は専業主婦として過ごすことになる。

さて、加藤さんはなぜここまで仕事をすることにこだわるのだろうか。それは、高校時代に1年間留学していた経験が原点にある。

『「あなたは何をしている人か」と聞かれると日本人はたいがい学校名や会社名を先に言うけれども、海外の人はエンジニアとかクリエイターとか自分が何者であるかを述べる。これに驚いた。その人のバックグラウンドをいくら話してもその人の魅力や存在感は通じない。このときから、将来は自分も海外の人のように何者であるかを人に言える存在になりたいと強く思ってきた」と加藤さんは話す。そして、専業主婦を続けた5年間を「このまま私の人生は仕事を持たずに終わってしまうのかと、とてもとても不安だった。『あのときなぜNHKを退社したのだろう』ががんばって仕事を続けることができたのではないか』『ほかの女性はなぜ疑問を持たないのか』というようなことばかり考えて悩んでいた」と振り返った。

素人ウェブディレクターの誕生

そして、子供が幼稚園に入るころになると、1日数時間でも時間をとれるようになってきたので、仕事を再開したい思いが日増しに強くなっていった。それがいまから3年前のこと。そこで、初めてPCを購入してマニュアルを見ながらセットアップしたり、インターネットに接続したりワードやメーラーなどのアプリケーションを使うようになったりと、独学で憶えた。また、これと同時にNHK時代の同期の人など過去の人脈を手がかりに今の自分にできる

仕事も探していった。

そこで、新番組を立ち上げる同期の人と出会い、番組連動のウェブサイトの制作に携わらないかと言われた。「PCやインターネットを憶えただで、ましてやHTMLなんてちんぷんかんぷんでどうしようかと思ったが『HTMLがわからなくても物事が判断できて文章がきちんと書けることが重要で、とにかく

NHK的なルールをよく理解していることが最重要。とりあえずウェブディレクターという肩書きで名刺を作って来て』と言われ、憶えただのPCで名刺を作って参加してみた」と言う。

番組制作者とのミーティングに出席した加藤さんはプロデューサーに、基本的には在宅で勤務したいこと、出勤しなくてもいい場合でも活動できるのは昼間の時間で夕方には家に帰らなくてはならないことの2つを仕事を引き受ける条件として出し、これを理解してもらった。それが、若きデジタルクリエイターを応援していこうとするBS1の「デジタルスタジアム（通称デジスタ）」という番組だった。この番組との出会いが加藤さんのその後大きく影響を与える。

ママさんたちと効率的に仕事

この仕事では、収録に立ち会ってどんな内容を書き起こすことから始めた。書いた文章は別の人がウェブサイトにアップロードするので、いわばライターの仕事だ。2週間に一度の定例ミーティングと収録に立ち会う以外は自宅で作事ができて、実際のウェブサイトの制作者などのやり取りはすべてメールと電話でできた。加藤さんにとっては願ってもない環境だったの



だ。しかし「自分のように仕事をするうえで制約がある人は自分でなければできない特色を持たなければ続かないだろうし、使う人も使いづらいはず」と考えていた。そこで、この番組のウェブサイトの中で「ももこコーナー」という独自のコーナーを立ち上げた。ここでは、番組に出演する芸能人やクリエイターの人たちに独自の視点で取材をしてレポートする。メールマガジンも発行した。このコーナーをきっかけにして、米国のシーグラフやフランスのアリス・エレクトロニカなど海外の取材やインタビューの仕事も入るようになった。

さらにこの仕事をして2年目には、デジスタのプロデューサーが新たに「インターネットディベート」という番組を手がけるので、そちらのウェブサイトの執筆も任せられるようになった。「そうなるたさずがに自分の条件では仕事が時間的にきつくなり、自分の周りにいる手伝ってくれる人を探した。すると『いまは子育てに専念しているけど条件が合えば仕事をしたい』と考えているママさんの多いこと。そうした人たちにテープ起こしなどをお願いするようになっていった」とワークシェアリングの体制ができていくのである。

こうして何人が使うようになると、報酬の支払いをスマートに行うには法人のほうがやりやすいと感じるようになり、2001年

5月に有限会社として起業した。企業のやり方は誰にも学ばず「インターネットでこし情報を得ただけだ」と言う。資本金の300万円はこういうときのために貯めていたへそくりを充てた。

仕事が仕事を呼ぶ

その一方で、デジスタをやったおかげでもう1つの仕事が舞い込んでくる。デジスタでは年に一度「デジタルアワーズ」としてグランプリ作品を決定しているが、初年度の海外アーティスト賞にフランスのユニットTEAMcHmAnのオンラインゲーム「banja.com」が受賞している。英語ができた加藤さんは来日した彼らの世話をしていたが、いろいろ話しているうちに日本への進出も視野に入れている彼らの日本でのエージェントを務めることになった。

banja.comには伊藤忠商事も日本での展開の可能性などについて注目しており、担当者は加藤さんとやり取りをするようになる。そうこうしているうちに、伊藤忠商事の担当者が加藤さんのそれまで手掛けてきた仕事を見て、まったく別の仕事を持ちかけた。それは今年の2月1日に埼玉県川口市にオープンした「SKIPシティ」の中核施設「彩の国ビジュアルプラザ」の「映像ミュージアム」にある「先端映像コーナー」の企画、運営だった。デジスタで知り合ったクリエイターやデザイナーのプロやプロの卵たちに協力を仰ぎ、作品の出展などを行った。

このように仕事の案件や取引先が増えてくると、今度は打ち合わせのスペースなどの面から自宅に対応することが難しくなってくる。そこで、渋谷(NHK)と外苑前(伊藤忠)の中間点に位置する場所として昨年の12月に東京都の南青山にオフィスを構えた。さらに、外出がちな加藤さんの代わりにオフィスの常駐スタッフとして今年3月から契約社員を1人雇った。

現在仕事をお願いしてネットワーク化している主婦は8人ぐらいでみんな在宅での仕事为主だ。そのほか大学院生にも活

躍してもらっている。そして、基本的にやり取りはすべてメールと電話で行っている。主婦の人たちの仕事は、ウェブライターやウェブサイトの更新、アートのスペースの在宅プランナーなど人によってさまざまだ。しかし「いきなり仕事をすべて任せることはせずにテーブル起こしや文章のリライトなど断片的な仕事をお願いしたあとで、その人のモチベーションや仕事のやり方を見極めたうえで責任あるポジションをお願いする」としている。主婦の中にも「経済面では補助的な収入を得られればいいので、自分にとってやりがいのある仕事をするのが重要」や「自分の貴重な時間を使うので意味のある仕事をしたい」、「なるべくたくさん収入を得たいので何でもやりたい」など、人それぞれ仕事をする目的が違う。加藤さんは「スタッフの働く目的をよく理解して気持ちよく仕事をしてもらうことがもっとも重要だと考えている。そうすることで仕事の質が向上し、それが評価につながり業績にもつながっていく」と経営者の顔を覗かせた。

SOHOの自覚と攻めの決意

インプレオの業績は、初年度の売上高が約2,500万円、2年目は同約3,500万円、利益も黒字を続けているが、金額としては数十万円。ここ最近では業容を拡大させたので、新たにオフィスの賃料が17万円かかるほか、これに伴う光熱費などもかかる。さらに、常駐スタッフを雇用し、仕事を発注している主婦らにも固定給払いと案件ごとの支払いとがあるが、1人あたりだいたい十数万円～約20万円支払っており、「自宅で仕事

をしていた時とは違って固定費が一気に跳ね上がったので営業努力をするなど経営的な面を本格的に考えないといけない。しかし、オフィスを持ったことで対外的な信用力が増したし、仕事がしやすくなった。固定費の上昇は攻める姿勢の表れだ」と加藤さんは気を引き締める。

加藤さんは「これまでSOHO(Small Office Home Office)を意識したことはなかったが、今回の取材で初めて自覚した」と言う。加藤さんはSOHOの定義を「小規模でかつ家庭、つまり自分のライフスタイルに合わせた働き方が可能なオフィス」と捉えている。従来の企業は発展していくことが宿命で利潤追求を第一にしてきたが、これに対してSOHOは「甘んじてスモールであり続け、利潤ではなく働く者の幸福を第一に捉える。その意味ではまさにインプレオはSOHOだが、もっと正しい意味だと“Small Office Happy Office”とも呼べる」と語った。飽くなき利益の追求よりも自分やスタッフ、クライアントがバラ



当社はアート事業のプロデュースに注力していく方針。映像ミュージアムのあるSKIPシティ「彩の国ビジュアルプラザ」3階にインプレオが企画した「先端映像コーナー」がある。コーナーに常設されている鈴木康弘氏の作品「遊具の透視法」。2001年度デジスタ最優秀作品。ビジュアルプラザのオープニング記念イベントとして、CGアーティストの河口洋一郎氏(右)と総合芸術家で狂言師の野村万之丞氏(真ん中)の対談を企画、運営。加藤さん(左)が司会進行を務めた。

スよくハッピーになることを目標にしているわけだ。

そのうえで、今後については業務内容は特に限定せずに、来る仕事は拒まずにできることは何でもやっていくかまえた。また「美術館や公共の施設などいわゆる箱物がどんどん造られる中で、展示物などコンテンツが圧倒的に不足していることをSKIPシティの仕事を通じて感じた。かといって、若いクリエイターらが育っていないわけではない。彼らも作品を発表する場を探しており、箱物と作品を結びつけるアドミニストレーターが少ない。そうした需要と供給を結びつける仕事を伊藤忠商事さんと協力して力を入れていきたい」と具体的な戦略も語ってくれた。

生き方の選択肢が少なすぎる

このように仕事の方は事業が拡大して加藤さんも多忙になったが、いったいお子さんとご主人はどうしているのか。「主人は

保守的な人なのであからさまに反対はしなかったが、基本的には家にいてほしいと思っていて決して快くは思っていない。主人の母を説得して味方に付けて、なんとかここまで来た。また、働きだしたときに幼稚園児だった子供たちも、いまは小学校2年と3年生になった。週に一度だけ遅い帰宅を許してもらって義母宅で預かってもらっているが、それでも門限は21時と決めている。それ以外にどうしても19時以降に帰宅する場合には近所のママさんを頼っている」そうだ。子供たちは「ママって社長さんだよ。お仕事楽しい？」などと聞いてきて、きちんと自覚していると言う。

加藤さんは、ずっと以前から「硬直的な働き方のスタイルは改めるべきで、どういう場面にあっても選択肢が多くあることが本当の豊かさではないか」と考えてきた。つまり、終身雇用制度が一番効率的な業種があるだろうし、成果主義がふさわしい業種もある。企業の業種や規模、目的によってさまざまな形が存在しているはずで、

「女性の働き方も正社員でばりばり働くか、単なる労働力の提供という形のパートで働くかという2つの選択肢だけではなく、その中間に位置するような働き方が求められている。2つの選択肢だけでは、かつて第一線で優秀な人材として活躍していた専業主婦の女性たちは、自分の潜在能力を発揮する場を社会に得られないままエネルギーを持て余している」というわけだ。

そして話は政策にまでおよぶ。「少子化対策が声高に叫ばれて24時間の保育所を増やすとか言っているが、幼児を深夜まで預けて

おきたいと思う親はいない。仕方なくそうしている人は多いでしょうが、そんな働き方をしていたら親も子ども疲弊しきってしまう。もっとも大事なのは、育児などに必要な期間休めることで、休んだ後もちゃんと仕事に復帰できることだと思う。子供を産んでもいろんな選択肢があり、それまでのキャリアも認められるといった対策を考えてほしい。そういう個別のライフスタイルに合わせた働き方が選択できるような社会になれば、女性は安心して子供を育てられるし、男性も豊かな生き方ができると考える」と熱く語った。

インターネットで広がった可能性

そして、こうした選択肢が広がる社会を思い描けるようになったのは「インターネットのおかげだ」と言う。「『いつでも、どこでも、だれとでも』を可能にするインターネットがなければ今の仕事は成り立たないし、起業もしなかった。仕事のやり取りはほとんどインターネットだし、会社の備品や家具などはすべてインターネットで注文している。経理は市販の会計ソフトウェアを使って自分で打ち込んでいるが、定期的にデータを税理士さんに送信してチェックしてもらっている」と、インターネットがなければ会社の経営も成り立たなくなっている。

そんな加藤さんに、最後に「あなたは何をしている人ですか」と聞いてみた。すると加藤さんは「うーん。何でしょう。まだ一言では言えない。『What do you do?』と聞かれたら『I own my company where I can do whatever I want to do by my style.』と答えると思う。やりたいことも、やれることもどんどん変化してきているので、これと限定できない。私自身がやれることはかぎられるが、やれる仲間を集めればいろんなことができる。会社はそういう器であればよいと思うし、私はそういう器のオーナーであればいいので」と答えてくれた。





[インターネットマガジン バックナンバーアーカイブ] ご利用上の注意

このPDFファイルは、株式会社インプレスR&D(株式会社インプレスから分割)が1994年～2006年まで発行した月刊誌『インターネットマガジン』の誌面をPDF化し、「インターネットマガジン バックナンバーアーカイブ」として以下のウェブサイト「All-in-One INTERNET magazine 2.0」で公開しているものです。

<http://i.impressRD.jp/bn>

このファイルをご利用いただくにあたり、下記の注意事項を必ずお読みください。

- 記載されている内容(技術解説、URL、団体・企業名、商品名、価格、プレゼント募集、アンケートなど)は発行当時のものです。
- 収録されている内容は著作権法上の保護を受けています。著作権はそれぞれの記事の著作者(執筆者、写真の撮影者、イラストの作成者、編集部など)が保持しています。
- 著作者から許諾が得られなかった著作物は収録されていない場合があります。
- このファイルやその内容を改変したり、商用を目的として再利用することはできません。あくまで個人や企業の非商用利用での閲覧、複製、送信に限られます。
- 収録されている内容を何らかの媒体に引用としてご利用する際は、出典として媒体名および月号、該当ページ番号、発行元(株式会社インプレス R&D)、コピーライトなどの情報をご明記ください。
- オリジナルの雑誌の発行時点では、株式会社インプレス R&D(当時は株式会社インプレス)と著作権者は内容が正確なものであるように最大限に努めましたが、すべての情報が完全に正確であることは保証できません。このファイルの内容に起因する直接のおよび間接的な損害に対して、一切の責任を負いません。お客様個人の責任においてご利用ください。

このファイルに関するお問い合わせ先

株式会社インプレスR&D

All-in-One INTERNET magazine 編集部

im-info@impress.co.jp